ＤＸ－ＳＲ８Ｊ(M)和文補足説明書

この度はアルインコのＤＸ－ＳＲ８Ｊトランシーバーをお求め頂き、誠にありがとうございます。
本書は、ＤＸ－ＳＲ８Ｊの操作について実用面での補足説明を致します。文中の「Ｐ．ＸＸ」は、英文説明書の関連ページを指します。イラストやチャートなどが掲載されておりますので是非ご参照ください。

注意：
取り扱いに関する注意は製品に同梱の和文簡易説明書(以下和文説明書)に記載されています。
異常が発生したときは速やかに電源を切り、弊社製品販売代理店又は弊社サービスセンターにご連絡ください。
Jは3アマ以上の資格でないとお使いになれません。3アマの場合、Mバージョンをお求め下さい。

● 設置、接続、免許申請について：
Ｐ．１３～１７に設置･接続についての説明がイラスト付きで記述されていますのでご参照ください。
無線局免許の申請方法は、和文説明書に記載があります。

操作の概要：
本機の操作概要は、大まかに以下のようになります。
1：ツマミ(ボリューム：ＡＦ／スケルチ/IFシフト/RIT･TXIT)には直接操作しか機能割り当てがありません。
2：メインダイヤルとキーボタン(以下キー)は、ファンクションやセットモードと連動して複数の機能を操作します。キーについては、キーゴムに印字の機能はそのまま押すとその動作を行い、パネル側に印字された機能はファンクション動作時(FUNCキーを一度押して、FUNCを液晶に表示させた状態で別のキーを押す)に操作できるようになります。このファンクションと、セットモードの操作(FUNCキーを1秒ほど押して、数字やローマ字が出る画面を出す)を覚えれば、本機は説明書を見なくてもほとんどの操作ができるようになります。Ｐ．７０～がセットモードの説明です。和文説明書Ｐ．１１に、操作キーとセットモード機能の早見表が掲載されているので、これを拡大コピーしてオペレーションデスクに常備しておけば、とまどうことは少なくなります。
3：よく使う周波数や２９ＭＨzレピーター、お気に入りのラジオ局受信などはメモリーを活用するとよいでしょう。Ｐ．４８～Ｐ．５４がメモリーに関する説明です。Ｐ．５３～からメモリーに7文字までの名前をつける方法を説明しています。
4：本機は通信型受信機としても活用できます。スキャンについては一般のモードの他、スケルチをかけずに使える時間経過スキャン(信号の有無に関係なく、一定の時間が経過すると次のステップやチャンネルに移行する)、プライオリティ、サーチスキャン(特定の周波数帯域を順に切り替

えてスキャン)、プログラムスキャン(上限下限を設定してその間をスキャン)が搭載されており、使い方次第で便利にワッチができます。スキャンの詳細はP.55〜を御覧下さい。
5:英文説明書でよく出てくる「PRESS〜KEY」はXXキーを一回押して放すか、イラストにあるアイコンが出るまで数回ポンポンと押す、「PRESS AND HOLD〜KEY」はXXキーを押したままにする、「TURN〜」はXXを回す、「SELECT〜」はXXを選択する、という意味です。
6:本機は、電源投入時、最後に電源を切ったときのVFO/メモリー状態を記憶して立ち上がりますが、ファンクション未確定(設定途中での切断)やスキャンなど一部の条件・状態は保持されません。バンド毎のAGCや標準電波形式設定の記憶方法は、セットモードで変更できます。

● 操作の練習とリセット

説明を読んでいても、本機の操作に慣れるまでは間違ったり、設定から抜ける方法が分かりにくかったりして困ることがあります。その時は、リセットをおこなってください。P.87〜に説明があるように、本機には完全リセット(電源を切って、FUNCキーを押しながら電源を入れる)、メモリーだけの消去(MHzとRFキーを押しながら電源ON)、機能だけの初期化(V/Mキーを押しながら電源を入れる)、の三つのリセットモードがあります。英文・和文説明書と本書を見ながら操作し、自分なりに説明書類の上にメモを書き加えたり、分からなくなったらリセットを掛けたりして、無線機になじんでから実際に使うメモリーやセットモードの設定を使いやすいようにカスタマイズすると効率的に本機をお使いになれます。

● 基本操作について P.25〜

正しく設置が済んだら、PWR(I/O)キーを押して電源を入れます。ボリュームとスケルチはツマミの操作でレベルを設定します。軽めのトルクですから知らない間に触れていて設定が変わることがあるので注意してください。運用モードはMODEキーを押す毎に変えられますが、MODEキーをしばらく押して表示が点滅に変わったときに▲/▼(以下▲キー)キーまたはマイクのUP/DOWNキー(以下 UP/DOWN キー)を押して選択することもできます。何かキー操作をすると点滅は消えます。

周波数はM/KHzキーを何度か押して点滅▼マークがMHz単位の数字の上に来るようにして▲キーかUP/DOWNキーを操作すると、バンド毎に切り替わります。M/KHzを押して▼を違う場所に移動してから▲キーかUP/DOWNキーを操作すると、MHz単位やKHz単位で周波数を変えられます。また、数字キーを押すことでも運用バンドを選べます。最後にダイヤルを回すかUP/DOWNキーを押して細かい運用周波数にチューンします。

周波数の直接入力をするには、ENTキーを押してから数字キーを押し、最後にENTキーを押して確定します。P.30に例を示したイラストがあるので参考にしてください。

本機はVFOを2つ(A/B)搭載しています。どちらでも同様に運用ができるので、素早くバンドを切り替えて使えます。FUNCキーを押してから1キーを押すとAとBが切り替わります。

送信についてはP．33より説明しています。FUNCと0キーで出力切り替えができます。ハムバンド外で送信しようとするとOFFが表示されます。QRP にはスーパーロー設定を自分で出力調整して対応することもできます。

ナローフィルター、受信感度設定を変えるRFゲイン、AGC設定、CW キーヤー関連などは、それぞれの電波形式での運用説明ページ（Chapter 2）やP．62〜の「特殊な機能」に記載されています。簡単な操作なので、すぐにお分かりになれます。同じ操作を繰り返すと機能をオフにできます。

P．67のマルチファンクション機能は、MFキーを任意のセットモード操作専用に割り当てるものです。FUNC＋MFキーで★のマークを点滅させ、点滅している間にFUNCキーを長く押してセットモードを呼び出し、▲マークで好きな機能を選んでからPTTなどキーを押して点滅を止め、MFキーを押すと登録完了です。CW運用が多ければキーイングスピード変更、BCLなども含めてワッチ時間が多ければスキャン再開条件変更設定、といった運用中にしばしば変更したいセットモード項目を割り当てておくと便利です。ほかにダイヤルやキーのロックなど、簡単で便利な機能説明があるので、この章は必ず目を通してください。

● メモリーモードについて

メモリーモードには、①VFO設定をメモリーチャンネルに書き込むシンプレックスVFO周波数登録、②クイックオフセット使用のスプリット、③VFO2つを使うスプリット、の3つがあります。

［シンプレックスVFO周波数登録］

本機にはA／B／ブランクの3つのバンクにそれぞれ200ch、合計600chのメモリーを登録できます。

［操作］ P．48の絵を参照してください。

1：任意のVFOで周波数、電波形式、フィルタ設定、RFゲイン、AGCモード、ノイズブランカー、CTCSSトーン、出力を登録したい状態に設定します。

2：FUNCキーを押します。メモリー番号が点滅します。（既に書き込まれているときは点灯状態です。そこに上書きすることもできます。セットモードのメニュー01で上書きを禁止することもできます）

3：V／Mキーを押すごとにA／B／ブランクとバンク表示が変わるので、任意のバンクを選びます。

4：▲キーかUP／DOWNキーを操作して、登録したいメモリーチャンネルを選びます。

5：すべてOKであれば、V／Mキーを1秒ほど押すとVFOモードに戻り、ビープ音が鳴って登録を終了します。V/M キーを押すと登録したメモリーデータが表示されます。それをベースにメモリーモードでも運用中に周波数を微調したり、RF ゲインを変えたりできますが、電源を入れ直すとオリジナルのデータに戻ります。

【スプリット運用とメモリー】
1：レピーターのようにいつも決まったシフトをかけるときは、②クイックオフセット使用のスプリットを使います。Ｐ．４２のクイックオフセットを参照してシフト幅を決定、その設定をＰ．４９にある説明のようにメモリー登録操作して使うと便利です。

【操作】
1：任意のＶＦＯで周波数、電波形式、フィルタ設定、ＲＦゲイン、ＡＧＣモード、ノイズブランカー、ＣＴＣＳＳトーン、出力を登録したい状態に設定します。
ＦＵＮＣ＋４キーでＣＴＣＳＳトーンエンコードをオンにできます。セットモードのメニュー１８でトーン周波数を選んでおきます。
2：ＦＵＮＣキーを押してＦＵＮＣ表示させた後、５キーを押してＳＰＬＩＴを表示させます。
3：ＦＵＮＣキーを押してＦＵＮＣ表示させた後、７キーを押してシフト幅を表示させます。初期値は0が並んだ状態です。この状態で▲キーかＵＰ／ＤＯＷＮキーを押し続けるとシフト方向と幅が変わります。マイナスシフトを掛けるときは▼かＤＯＷＮ（数字の前に- -が表示），プラスシフトは▲かＵＰキーを押し続けます。例えば－１００ＫＨｚシフトのときは- -０．１００．００とします。Ｍ／ＫＨｚ以外のキーを押してシフトを確定します。
4：ＦＵＮＣキーを押して▲キーかＵＰ／ＤＯＷＮキーを操作、登録したいメモリーチャンネルを選びます。
5：すべてＯＫであれば、Ｖ／Ｍキーを1秒ほど押すとＶＦＯモードに戻り、ビープ音が鳴って登録を終了します。

パイルアップ時など相手の指定スプリット幅が変わる場合には、③ＶＦＯ２つを使うスプリット、を使います。Ｐ．４５にあるように、ＶＦＯ ＡとＶＦＯ Ｂにそれぞれ受信･送信の周波数を設定し、ＦＵＮＣ＋５キーでＳＰＬＩＴを表示させて運用します。コールしているときに数キロヘルツずらす、といったことが簡単にできます。解除するにはＦＵＮＣ＋５キーをもう一度操作します。この設定もＰ．５０のようにメモリーできますが、実際には DX 局がパイルを捌く時にいつも同じ周波数、同じシフトで運用することは非常にまれですから、メモリーしてもあまり意味はありません。それよりもスプリット運用の方法を記憶してその場で操作する方が実用的です。

＊メモリーチャンネルの消去は、消したいチャンネルに合わせてＦＵＮＣキーを押し、ＦＵＮＣ表示させた後3キーを押します。メモリー番号が点滅を始めたらＯＫです。
＊メモリーをすべて消したいときはＭＨｚとＲＦキーを押しながら電源を入れます。
＊メモリーにある状態をＶＦＯにコピーするときは、ＦＵＮＣキーを押してから2キーを押し、ＶＦＯ表示が点滅したら▲キーかＵＰ／ＤＯＷＮキーを押してコピー先のＶＦＯ Ａ／Ｂを選んでからもう一度２キーを押します。Ｖ／ＭキーでＶＦＯに戻るとそのデータがコピーされています。

● スキャンについて

本機に搭載のスキャンモードについて説明します。

＊ ＦＵＮＣキーを押して、ＦＵＮＣ表示中に8キーを押すとスキャンが始まります。

＊ スキャン中に▲キーかＵＰ／ＤＯＷＮキーを操作するとスキャンの上下方向を変えることができます。

＊ どのモードでスキャンを始めるかはセットモードのメニュー０４で設定します。ＳＥＬＥＣＴを設定すると、ＦＵＮＣ＋８キーを押した後、スキャンタイプが表示されるのでダイヤルや▲キー、ＵＰ／ＤＷＯＮキーを使ってタイプを選んでから8キーを押します。プライオリティスキャンは、後述の操作が必要です。

＊ ダイヤルに触れる、ＰＴＴや操作キーを押す、といったなんらかの操作（▲キーかＵＰ／ＤＯＷＮキーの操作以外）をするとスキャンは止まります。

(1) バンドスキャン：設定したステップで今ＶＦＯ設定されているバンドをスキャンするモードです。Ｐ．５５の図にあるように、例えば２１ＭＨzハムバンド内にいれば２１ＭＨzハムバンド内を周回してスキャンします。２１．４５０ＭＨzを越えたところからスタートすれば、２１．４５０から、次のハムバンドの下限である２４．８９０までの間をスキャンします。

(2) プログラムスキャン：ＶＦＯ ＡとＶＦＯ Ｂにそれぞれ1ペア設定できるモードで、任意の2点間をスキャンします。あらかじめＡ／Ｂどちらかのｖｆｏで、スキャンしたい上限と下限の周波数を設定して、それぞれＰ１とＰ２のメモリーチャンネルに書き込んでからしか動作しません。例えば短波放送２２mバンドの下限 13.570 と上限の 13.870kHz をメモリーしてスキャンするように使います。

(3) サーチスキャン：セットモードで別途設定する一定の幅（５０／１００／２００ＫＨz）の間を高速スキャンします。信号が有っても止まりませんし、スケルチの有無に関わらず動作します。スキャン中に▲キーかＵＰ／ＤＯＷＮキーを操作すると次の幅に移動します。Ｐ．５６に図があるので参考にしてください。このモードは信号を探すと言うよりも、自分がこれから運用しようとするバンドがアクティブかどうか、ざっと聞いてみるのに使います。

(4) メモリースキャン：メモリーモードに入ってスキャン操作をすると、メモリーチャンネルに書き込まれているチャンネルをスキャンします。メモリーチャンネル登録してからでないと動作しません。

(5) プライオリティスキャン：ＶＦＯとメモリーを使って、どちらかに主に聞いていたい周波数、もう一方に時々チェックしたい周波数を設定すれば、一定のサイクル（表示周波数側5秒、プライオリティ側０．５秒。但しスケルチを掛けていないと2秒）で交互受信します。スケジュールＱＳＯで相手が出てくるまでラジオ放送を聞いていたい、というようなときに使います。組み合わせはＰ．５７を参照してください。メモリーチャンネル登録してからでないと動作しません。

１：プライオリティ側（短く受信する方）で受信したい周波数をＶＦＯ設定するか、メモリーチャンネルから選びます。

２：Ｖ／Ｍキーを押して反対の運用モード（ＶＦＯ又はメモリー）に行き、通常受信したい方の周波数を設定します。
３：ＦＵＮＣキーを押して、６キーを押します。

【スキャンの再開条件について】
セットモードＰ．７３でスキャン再開条件を（Ａ）と（Ｂ）、いずれかから選べます。どちらのモードでもスケルチを掛けなくてもスキャンは動作しますが、異なるのは：
（Ａ）設定ではスケルチが閉じているときは高速スキャンして、信号があったらそこで止まって、指定した時間が過ぎたらまた高速スキャンを再開します。スケルチが開いているときは、指定した再開時間刻みでスキャンし、信号があったらそこで止まって、指定した時間が過ぎたら次のチャンネルやステップに移ります。セットモードの（Ａ）設定条件中、ＯＦＦは「信号があったらそこで止まりスキャンを再開しない」、０は「信号が無くなるまでスキャンを再開しない」、Ｂ０は「信号があってもスキャンを止めない（幅を設定しないサーチスキャンのような状態）」です。
（Ｂ）設定ではスケルチの開閉に関係なく指定した時間刻みでスキャンして、信号の有無に関わらず指定した時間が過ぎたら次のワンステップかメモリーチャンネルを一定時間スキャンします。データ通信などを自動巡回ワッチしやすいように、最長３０分まで１つのチャンネルをモニターできるよう長めの時間が設定できるようになっています。

● セットモードについて
Ｐ．７０からはセットモードの説明です。
セットモードの操作は以下の通りです。
１：ＦＵＮＣキーを１秒以上押すとアルファベットや数字の文字が表示されセットモードになります。ＶＦＯ表示の右横に２桁の数字が出るのが、セットモードのメニュー番号です。
２：▲/▼キーかマイクのＵＰ／ＤＯＷＮキーを操作して変更したいメニューを選択します。
３：メインダイヤルを回して好みの設定値を選択します。ＯＮ／ＯＦＦ（ＯＦと表示されることもあります）しか値が無い場合は、ダイヤルを右か左に回すだけです。
４：▲/▼キーかマイクのＵＰ／ＤＯＷＮキーを操作すると今の値が反映され、次に変更したいメニューが選択できるようになります。
５：同じ操作を繰り返し、セットモードでのカスタマイズを終えたら▲/▼キーかＵＰ／ＤＯＷＮキー以外（ＰＴＴキーが一番便利です）を押してセットモードを終了します。このとき、ビープ音が鳴ります。

セットモードでは、２３の項目がカスタマイズできます。内容は本機に添付の和文簡易説明書P.12をご参照ください。

補足：以下、セットモードで注意の要る機能についてのみ説明します。

○　メニュー０１：メモリー上書きの禁止：これは単に書き込み済みのメモリーチャンネルへの上書きを許可するか・しないか、です。この設定にかかわらず、メモリーの消去は行うことができますので注意してください。

○　メニュー０２：メモリーチャンネルデータの一時変更許可：ＯＦ（オフ）設定にすると、メモリーチャンネルに登録のデータはRIT／TXIT以外、一時的に変更することができなくなります。ＯＮで設定を変えられるようにして運用、メモリー内容を変えてしまっても、電源を入れ直すと元のメモリーデータで立ち上がりますから、通常はＯＮ設定で良いでしょう。スケジュールＱＳＯのチャンネルを設定していたのに、うっかりダイヤルをいじってＦズレしていてコールに気が付かなかった…というようなことを防ぐために設けた設定値です。

○　メニュー０３：タイマースキャン設定：（A）の設定では、スケルチを効かせておかないとスキャンしません。信号があってスケルチが開いたらスキャンを停止、設定時間後再開します。（B）はスケルチをかけなくても、信号の有無も関係なしに、決めた時間が経過したら次のチャンネルやステップを受信します。

○　メニュー０４：スキャンボタンを押したとき、どのスキャンを実行するか決めておけます。そのたびにどれを使うか手動で決めたいときはＳＥＬＥＣＴを設定しておきます。ＢＡＮＤはＶＦＯの全チャンネルスキャン、プログラムは別途設定した2チャンネル間のスキャン、サーチはメニュー０５で別途指定した幅（例えば１００ｋｈｚ）で順にスキャン、です。スキャンは他にプライオリティ（気になる１ｃｈを数秒おきに瞬間モニターする）もありますので、Ｐ．５５～のスキャンに関する項目をご参照ください。

○　メニュー０９：ＵＳＢ／ＬＳＢをバンドに合わせて自動設定するかどうか、です。ＯＮだと自動、ＯＦＦだと前に電源を切ったときのモードで立ち上がります。自動ＯＮでもボタン操作でモードを切り替えられますが、電源を入れ直した時には自動設定で立ち上がります。

○　メニュー１９：スピーチコンプレッサ：ＳＰＨ－ＡＬＬではＦＭモードでもコンプレッサが掛かります。通常は使わないのでＳＰＨ－ＯＮかＯＦＦでお使い下さい。

○　メニュー２２：マイクのＵＰ／ＤＯＷＮキーはスキャンのスタートか、キーを押している間だけ周波数などを決まったステップで上下に動かす２つの役目をどちらかに選んで使えます。

○　メニュー２３：ＦＵＮＣキーは、初期値では次にキーを操作するまでファンクションモードを保持しますが、ＡＴを選択すると操作が無いまま5秒立つと自動的にファンクションモードを解除します。

●　その他の機能について

ここでは、本機が搭載するその他の便利な機能について注意点だけ説明します。詳しい操作方法は英文説明書をお読みください。

＊　メモリーネーム：登録したメモリーを文字や数字で表示できます。6桁まで表示できます。登録時、操作を繰り返して7番目まで文字が点滅したら6桁までの入力が完了します。Ｐ．５３～

＊　メモリースキップ：メモリーしたチャンネルをメモリースキャン中に飛ばしたいときに使います。飛ばすメモリーを選び、ＦＵＮＣ＋Ｖ／Ｍキーで小数点が表示されたらＯＫ，同じ操作を繰り返すと解除できます。スキップ設定中のチャンネルもスキャンしたいときはセットモードのメニュー０６でＮＯ　ＳＫＩＰを選びます。Ｐ．６０～

＊　プラスマイナスデルタエフ：ＲＩＴ／ＴＸＩＴで一時的に送受周波数を変えているとき、その設定をＶＦＯにコピーして、ＲＩＴ／ＴＸＩＴ機能から抜けるときに使います。ＲＩＴ／ＴＸＩＴ運用中にＦＵＮＣキーを押してからＲＩＴキーを押すだけです。ＲＩＴ表示の解像度がＶＦＯ表示解像度より低いため、操作を終了すると例えば１．１ＫＨｚしかずらしていないように見えたものが実際は１．１５ＫＨｚずれていた、ということが起こります。Ｐ．６６～

＊　ケーブルクローン：市販のステレオミニプラグ付きケーブルを使って、２台のＤＸ－ＳＲ８Ｊを全く同じ設定にクローンできます。モードキーを押しながら電源を入れるとＣＬＯＮＥと表示がでます。このクローンモードへの入り方はメモリー編集ソフトなどが供給された場合に操作が必要になることがあります。

● 調整について

本機はアマチュア無線機です。従い、工場での調整設定を以下の項目について上級ユーザーが任意に設定変更できる調整ポイントを設けています。これは弊社がユーザーに調整を強制する物ではなく、調整の失敗による弊害や故障はすべてユーザーの責任とし、修理は保証対象外として有償になります。詳細はＰ．８５を御覧ください。尚、一部に電源を入れたまま行うポイントがあります。危険ですから、無線機のメンテナンスに慣れた方以外は絶対に調整を行わず、サービスセンターにご相談ください。測定器や工具が必要な項目もあります。下記以外のＶＲ等は絶対に触らないでください。ＶＲの調整にはセラミックの調整棒を使用し、金属のドライバーはショートの原因になるので絶対に使わないでください。

１：マイクゲイン　ＶＲ１１７　時計回りでゲインが深くなります。

２：ビープ音量　ＶＲ１０９　時計回りで音が大きくなります。

３：サイドトーン音量　ＶＲ１１１　時計回りで音が大きくなります。

４：スーパーＬＯＷ出力設定　ＶＲ１２０　時計回りで出力は大きくなります。０．１～２Ｗ程度の間で微調整ができます。

５：最高出力設定：ＭＡＸ１００Ｗか５０Ｗかを設定します。Ｉポイントのランドをハンダでブリッジするかどうかで決まります。

ヒューズの交換はＰ．８６を御覧下さい。必ず電源コードを抜いて行って下さい。

● アクセサリーについて

弊社のＥＤＸ－２オートチューナー、ＥＤＳ－１７セパレートキット（Ｐ．１５）がオプション設定されています。ＥＤＸ－２の接続はそれに添付の日本語説明書にも詳しく説明があります。又、製造を終了しておりますが、旧製品のＥＤＸ－１アンテナカプラーも電源ケーブルをＥＤＸ－２のポートと同じ場

所に接続することでお使いになれます。

マイクについては、弊社の８ピンコネクターのハンドマイクが全て電気的にはお使いになれますが、インピーダンスやマイクエレメントの違いにより、運用モードによってはかなり音質を損ねることがあります。ＥＭＳ－６４又はＥＭＳ－４１のダイナミックタイプをお使い下さい。マイクインピーダンスは300Ωです。

本機は、市販のモービルブラケットやつり下げハンドルがお使いになれるよう、ネジ穴を付けてあります。適合ネジのサイズはＰ．９１に記載の通りです。短すぎると落下の危険があり、長すぎると内部の基板を損傷する恐れがあるのでネジの種類は厳守してください。適合のブラケットやハンドルについては販売店にご相談ください。

以上